



秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

LIBRARY

「輸出九谷」を通して振り返る、 九谷焼の歴史

第七話

横浜で九谷焼の輸出業に関わった経歴を持ち、現在は語り部として活動する庄川良平さんを訪ねます。貴重な資料を拝見しながら、戦前から高度経済成長期の戦後を経て、時代と共に九谷焼がどのように変化してきたのか歴史を紐解きます。

「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

長い歴史に育まれてきた九谷焼の「技」は、いかに生まれ、今後どのように変化していくのでしょうか？KUTANism総合監修・秋元雄史が自らその現場に足を運び、ナビゲーターと対話をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

WEB版はこちら





#07

「輸出九谷」を通して振り返る、九谷焼の歴史

KUTANism全体監修・秋元雄史が自ら現場に足を運び、ナビゲーターと対談をするなかで九谷焼を再発見していく連載シリーズ「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」。第7話は横浜で九谷焼の輸出業に関わった経歴を持ち、現在は能美市寺井町で語り部として地域の活性化に尽力する庄川良平さんに話を伺います。

訪れたのは、旧北国街道沿いにある庄川さんが暮らす築100年以上の町家です。風通しがよくゆったりと落ち着いた時間が流れる空間で、大切に保管されていた海外輸出用の九谷焼「輸出九谷」のティーカップや戦前に開催された万国博覧会の冊子など、貴重な資料の数々を拝見。九谷焼が国策として輸出された戦前から高度経済成長期の戦後を経て、時代と共に九谷焼がどのように変化してきたのか、歴史を紐解きます。

目次

- ✓ 歴史の目撃者として使命感を持ち、明治、昭和期の九谷焼を語り継ぐ
- ✓ 輸出工芸で外貨を獲得した時代から、高度経済成長期へ
- ✓ 激動の時代に翻弄された九谷焼
- ✓ この回のまとめ



案内してくれた人

庄川良平さん

昭和21年(1946年)10月15日生まれ。両親が九谷焼の卸し業を営んでおり、幼い頃に仕事の都合で横浜へ。高校卒業後から家業の九谷焼貿易商を手伝う。定年と同時に生まれ故郷である能美市寺井町に戻り「私(わたくし)カフェ」として住み開きをスタート。月1回、この場所に集いざっくばらんに語り合うおしゃべりサロンは2021年で9年目を迎えた。また若手作家のサポートにも取り組んでおり、春と秋の年2回、自宅を会場として石川県立九谷焼技術研修所の学生や卒業生の作品展を開催している。

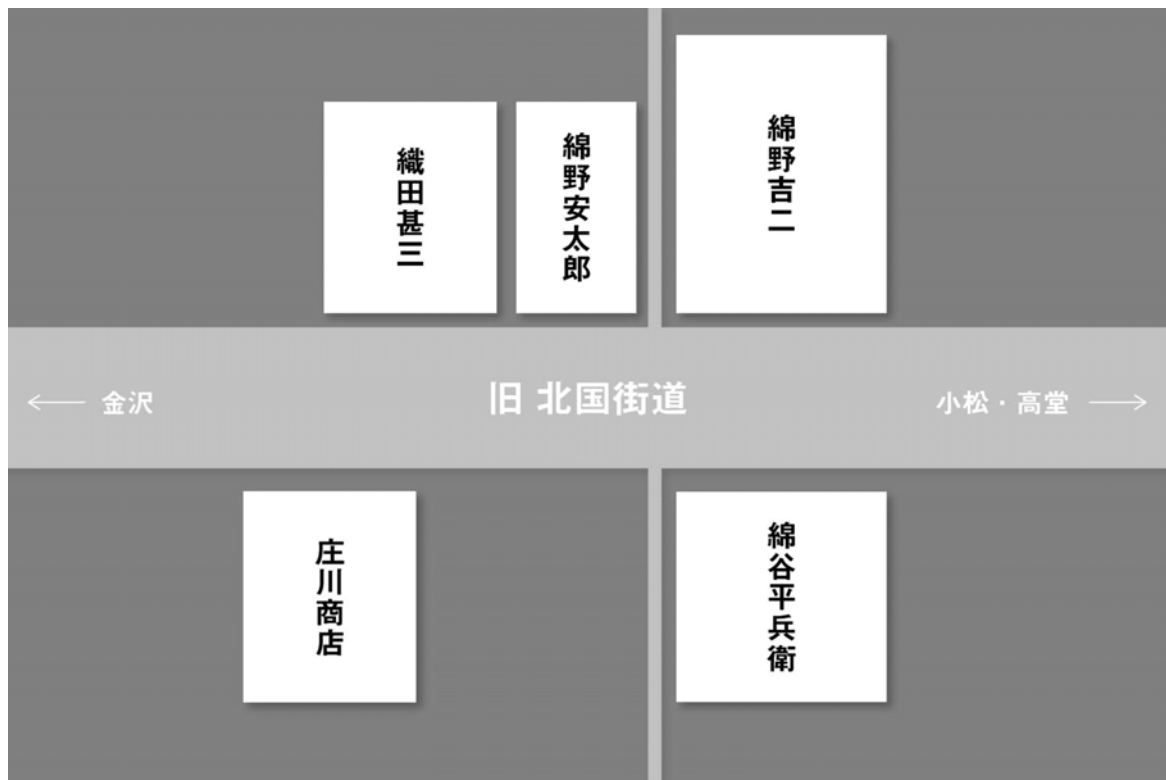
歴史の目撃者として使命感を持ち、 明治、昭和期の九谷焼を語り継ぐ



庄川さんがカフェとして解放しているスペース。靴を履いたまま立ち入れるので、地域の人々が気軽に訪れる憩いの場となっている。

秋元： すごく雰囲気があって素敵なお自宅ですね。今日はよろしくお願いします。

庄川： ようこそいらっしゃいました。僕が知っている限りお話したいと思います。今は何も残っておりませんが、昔はうちの向こう三軒両隣に明治20年代に取扱高で日本一というほど大変活躍をされた輸出商が4軒あり、それぞれ綿野、綿平、綿安、織田といいました。私の祖父・良能は四人兄弟の末っ子で、次男の庄次と庄川商店を創業し、九谷焼の輸出に夢を馳せていました。当時はみんな横浜の本町通にお店を構えていたのですが、取次では利益が少ないということで、直接外国へ行って販売する直売を目指そうと万国博覧会(万博)を一つの足掛かりに現地で取引先を見つけてヨーロッパやアメリカに九谷焼を売っていたんです。ですが良能と庄次兄弟は良い時代が過ぎ去った後から横浜へ行ったものですから、「改めて製造を一から勉強しないといけないんじゃないか」ということで、弟の良能が寺井に戻ってきて、この家の一軒離れたところにあった工場で焼き物の修業を始めました。それからしばらくは問屋として店をしていたんですけどね。しかし、だんだんと輸出がだめになっていって、結局は内地もの(国内向け)の商売をしないと食べていけないということで事業を畳んでしまったんです。



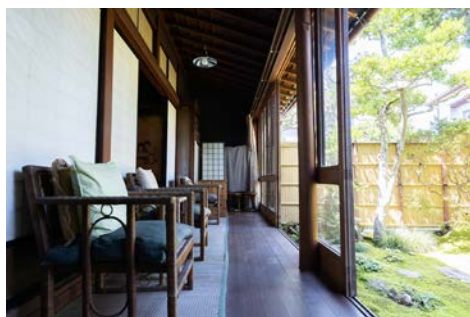
秋元：「輸出がだめになった」というのはいつ頃だったのでしょうか。

庄川：ピーク時はこの界隈で作っている焼き物の80%が輸出向けの「貿易物」だったのですが、明治の末頃には本当に輸出が少なくなって、記録に残っている取扱高では出荷の10%に満たない量となっているんですね。そんななかでも良能、庄次兄弟は外国人相手の商売に気色の良さを感じて、だんだん環境は厳しくなるけれど、とにかく貿易を続けていきましょうということで、しばらく頑張っていました。

秋元：そんなに減ってしまうのですね。お向かいで先行して貿易をしていた輸出商は、その頃には手を引いていたのですか？

庄川：立派に商売を続けていて、横浜という土地柄もあり、成功して多角経営のように事業を広げていらっしゃいました。貿易は焼き物からスタートしているのですが、生糸や毛皮なども取り扱うようになっていました。当時は繊維関係が伸びていましたからね。綿野さんは後の京浜急行電鉄となる、大師電気鉄道という鉄道会社を買収するほどの凄腕だったんですよ。

秋元：まさに日本が勢いよく発展していく時代ですね。貿易物として九谷焼を扱っていたとのことですが、当時は薩摩焼や有田焼など他の産地の焼き物も、全て横浜に集中していたということですか？



気持ち安らぐ自然とつながった家。手入れが行き届いており100年以上経った今でも良い状態を保っている。

庄川：九谷焼の場合、当初は神戸だったんです。それが、だんだん交易の中心都市が東京になってきたのと、神戸は近くに京都も名古屋もあって競争相手が多すぎるということで、横浜に行ったんですね。

秋元：九谷焼は、輸出に関しては後発組と言われていますよね。しかし国を挙げて輸出工芸に力を入れていたので、九谷も頑張ろうということで舵を切ったのでしょうか。

庄川：そうですね。それ以前は日本が海外に輸出できるものといえば原材料のようなものしかありませんでしたが、明治

政府が殖産興業政策を打ち出して初めて、加工物として通用する品物として工芸品が脚光を浴びたわけです。

秋元： 明治時代、外貨を獲得するのに一番貢献しましたから、当時は本当に国を支えた産業でしたよね。当時のものづくりとしては産地で作って、それを横浜まで運んで輸出するような形だったのでしょうか。

庄川： どうやって大きなものを横浜まで運んでいったのかと思うのですが、伝え聞くところによれば、例えば壺の場合、薦(こも)のようなもので包んで天秤棒を渡し、4人で一つの壺を担いで行っていたようです。



秋元： 船ではなく陸路で行っていたのですか？相当大変だなあ。

庄川： 船で行くとすれば日本海から瀬戸内海まで出ないといけませんので、陸路だったんです。横浜から北陸につながる鉄道が開通したのが明治半ば、しかしそれは福井県敦賀市までだったので、金沢まで開通するのはずっと後のことです。

秋元： 鉄道が開通するまでは、個数もそれほど運べなかったでしょうね。

庄川： そうですね。初期の万博に出品したものは鉄道が続いていない時代の製品になりますので、人力で運んでいたということです。薄挽椀にしても、ザルのようなものに入れて持っていったようです。ちなみに薄挽椀の生地は当時の九谷には作る技術がなかったため、美濃とか京都から生地を仕入れて、ここで絵付けをして横浜に送っていたんですよ。



秋元： え、そうなんですか！

庄川： あちらの方が遥かに薄い物を作る技術があったのと、原材料となる陶石の特徴もあり、九谷で薄いものを作るのは難しかったのではないかと思います。それならば仕入れて、絵付けだけやろうと。しかし後になって、生地を仕入れるのも面倒なので、例えば名古屋や神戸、横浜などで絵付けをした方が効率が良いのではということになり、九谷

の職人が県外へ出て行って、そこで「名古屋九谷」や「神戸九谷」、「横浜九谷」というものをたくさん作るようになりました。そうすれば作ってそのまま輸出できますからね。こういった動きは戦後まで続いていました。

秋元： たしかにその方が重たい生地を運んできて、こっちで絵付けをしてまた運んで、とするよりも遥かに効率が良いですもんね。

庄川： 私が横浜で家業を継いだ頃、スーベニール屋（おみやげ屋）というのは風前の灯だったのですが、それでも名古屋で作った「名古屋九谷」を仕入れて販売していましたよ。



輸出九谷の品物。庄川さんは「今日まで運命を共にしてきた戦友ともいうべき品々」と親しみを込めている。

庄川： こちらが家に残っていた薄い椀皿です。

秋元： 触ってみても良いですか？すごく薄いなあ。しかし、こういったものを作る職人が九谷にはいなかったということなんですね。

庄川： そもそも和食器は別として、食器類を作る窯元がなかったのだと思います。絵付けは今と比べるとまだまだ技術力が低いですよ。美術的な価値はほとんどありませんが、手に取ったときに面白いと思っていただけるようなものを作っていました。これは卵の殻のように薄いということで、「エッグシェル(eggshell)」というネームで販売していました。



素地が薄いため、内側に外側の絵が透けて見える「エッグシェル」。大正から昭和にかけて作られていた。

秋元： 博覧会に展示されているような巨大な壺や花生などが輸出された一方で、このような日常生活に使える商品も並行して輸出していたと考えて良いでしょうか。

庄川： そうですね。ただ、こういうものは日用品ですので、やはり大きい作品に比べると、なかなか現在まで残っていないんですよ。

秋元： しかし、相当面白い作品だなあ。

庄川： しつこいですよね。裏までびっしり絵を描くという笑。これも九谷ならではの特征だと思います。



秋元： ティーカップのほかに皿類もあったのでしょうか。絵柄はやはり日本的な柄が多いですね。

庄川： ケーキ皿やデミタスなどもあります。描かれているのは山水、花鳥、人物がほとんどですね。これはもともと、りんご箱に雑に入っていたのを見つけて勿体ないと思い、一生懸命洗って綺麗にしたものなんです。

秋元： 金彩の部分には本金が使われているのですか？

庄川： 本金も使われていますが、この時代は圧倒的に水金、絵の具の金が多いですね。洋絵の具がほとんどです。この透かしの作品も面白いので、ぜひご覧になってください。



光に当てると、底の部分に女性の顔が浮かび上がる。

秋元： これは面白いですね。陽刻(※)になっているのでしょうか？

(※)陽刻／文字や絵などを浮き上がらせて彫ること。

庄川： はい。当時はこういったものが流行ったんですね笑。面白さで魅せるわけです。これに九谷ならではのコテコテの上絵を付けて売っていました。こちらは美濃で作られたものです。

秋元： 今はある程度、九谷焼のパターンが決まってしまうじゃないですか。でも実はこういったカップや皿といった形の方が、九谷的なものでは過剰な装飾性などが生きると思うんですよね。なんで途切れてしまったんだろうと思って。

庄川： そうですね。ここに九谷焼の引出がありますが、どうして今作らないのかなって思います。九谷焼は絵がしつこいので、小さいもので日常のアクセントになるようなものは、とても相性がいいと思うんです。昔、横浜の店で見たのは薩摩焼のボタンですね。あれはよく外国人の方に売れました。

秋元： こういうものの方が九谷焼の場合は向いているというか、面白いと思うけどなあ。



庄川さんの自宅にある九谷焼製の引出は戦前に作られたものという。

輸出工芸で外貨を獲得した時代から、高度経済成長期へ

庄川： 当時の商人というのは、いわゆるプロデュース力を持っていたんですね。自社製品を作るのが問屋の役割と言いますか。

秋元： そうですね、それぞれがオリジナルの商品を開発していましたもんね。ちなみに当時、海外に輸出していた問屋さんってどれくらいあったのでしょうか。

庄川： ちょうど資料が残っているので、こちらを見ながらご説明させていただきますでしょうか。横浜にいた頃、震災と戦災に遭っているのが本当に資料が残っていないんです。これは大正13年に発行された「窯業名鑑」といって、横浜市の陶磁器輸出商の欄にこの辺りで貿易商を営んでいた4軒の名が並んでいます。



「九谷焼陶磁器貿易商 庄川庄次」の名前が確認できる。

庄川： 石川県能美郡（現在の能美市）のページにも、陶磁器輸出商がありますね。



庄川： こちらは金沢市のページです。



秋元： 「陶磁器輸出商」と国内向けの「販売業」で分けて記載してあるのですね。しかし、ものすごい数の窯元やお店があるなあ。

庄川： 輸出というのは花形の商売で、別格の扱いだったんです。つい最近まで残っていたのですが、今となっては本当に少なくなっていましたね。やはり高度経済成長期に突入して「工夫しなくても売れる時代がきた」というのが、結果として裏目に出てしまったように感じています。

秋元： 明治時代には、それまで産地ごとに生産されていた工芸品が、対海外という視点で互いに協力しあって頑張ろうという流れになり、必然的に今のような発想になりますよね。こっちで作るよりも美濃で作って、派遣した九谷焼の職人が現地で絵付けした方がはるかに効率が良いという。ですので海外向けの輸出工芸の時代には、産地はほとんど前に出てこなかったのでしょうか。

庄川： そう思います。国策として、とにかく外国へ売っていかうということだったのでしょう。

秋元： 外貨獲得するための輸出産業と割り切り、ジャポニズムが評価を得ていることもあり、日本国内で細かく分けるよりも全部ひっくるめてこれが「ニッポン」だと、力を入れて発信したと。



庄川： そうですね。輸出産業により九谷焼の分業化が一気に進んだわけですが、当時は今と違って、窯元が発注したものを絵付け師が絵付けし、彩釉のプロが色を塗るというような分業だったんです。ところが近代に入ると、今度は互いのリスクを減らすために仕事を分けましょうということになりました。例えば一軒で売れなくなると、それに関連した職人たちも全部潰れてしまう。なので窯元は窯元であちこちの仕事に手を出して、絵付け師は絵付け師で、庄川のものだけ作っている共倒れのリスクがあるので、自分の絵を3軒くらい引き受けますよと、そういう形の分業化になったんです。不況や経済変化に備えて、生き残っていくためには分かれていた方がいいよね、ということだったんですね。

秋元： その方が結果として良かったということでしょうか。

庄川： 問屋は一から最後まで全てプロデュースするとなると、万が一それが立ち行かなくなった際に全部ダメになっちゃうんですね。その危険を回避するために、製造から販売まで一貫で行うことはやめましょうと。しかし、そんな時代の流れに逆らうように、戦後まもなく私の父・良一と能美市長の祖父にあたる井出善朗さんが二人で「九谷陶磁器株式會社」を立ち上げました。二人は当時の分業制を批判して、とにかく製造から販売まで一貫して行おうと考え会社を作りました。有能な若手を引く職人や絵付け職人を雇い、工房で色んなことをやってみよう。結果として6、7年で会社は潰れてしまうことになるのですが。



秋元：初めてお聞きする話ばかりで驚いています。輸出工芸から昭和のバブル前あたりの変化というのは、簡単に理解することはできません。一体どのように業界が転換していったのかとか、作られる作品がどのように変わっていくのかというのが、今ひとつイメージしづらいと言いますか。アート工芸、展覧会工芸といった話に一気に流れてしまうので、その影に隠れて、産業の変化がわかりづらくなっているような気がします。国の政策にしても「日本を代表する品物を作りましょう」という方針になってしまい、本来の職人の技や仕事の良さがなかなか見えてこないですよ。いま一度、民間の動きを整理する必要性を感じています。

庄川：結局、明治の半ば頃から続いている店が一軒も残っていないので、それで話がつながらないというのもありますよね。僕は問屋業界のなかでは輸出商というアウトサイダーなので、こういう話をするのですが、内地(国内)向けで商売していたお店はほとんど残っていないので、語る人がおらず検証する方法がないのだと思います。

秋元：それも途切れ途切れなので、なかなか繋がりが見えてこないですよ。

庄川：それに加えて九谷焼というのは立派なブランドですから、商売人は「古九谷から連続と360年間続いてきた焼き物」という説明をしがちなんです。でも私は、ここでスタートした九谷焼は、それとは全く違う種類の別物の焼き物だと言ってもいいくらいだと思っています。九谷庄三という人物によってこのようなことになるのですが笑。

秋元：やはり元を辿ると庄三に行き着くのですね。

庄川：そうです。庄三があちこちで修業してここへ戻ってきて、この家のすぐ近くに「九谷庄三工房」を作り、たくさんの職人を雇って量産していきました。量産した製品を売り捌かなくてはならないということで、初めは庄三自身があちこちへ売ろうとしたのですが、全く売れない。これは手に負えないとなって、この隣近所で商売をしていた綿野や綿平、綿安も、陶器を扱うようになったのです。そんななか「明治政府が殖産興業で工芸品を国の産物として海外へ売っていくらしい」という話を耳にして、一気に「庄三の九谷焼を輸出しよう」という流れになります。庄三自身は明治16年に亡くなるのですが、庄三工房に残った人たちが引き続き膨大な数の九谷焼を生産していました。しかし、庄三があざといんですよ。自分の名前に「九谷」なんてつけちゃうんだから笑。そこで作られたものはなんと言ったって九谷焼になっちゃいますよね笑。

秋元： 輸出工芸の中心が庄三風(※)になっていったのは、どのような理由からだと思いますか？

(※) 庄三風／飯田屋風の赤絵金襴手をさらに工夫し、九谷庄三が編み出した作風。彩色金襴手により花鳥山水などを描く。明治期以降の産業九谷は、庄三風にならったものが主流だった。

庄川： それは庄三が五彩をはじめ赤絵や金彩など様々な技法を学び、全部一緒にたにして自分の仕事に取り込んでしまったということが理由でしょうね。

秋元： やっぱり「なんでもできる」というのが一番のポイントだったのですね。



当時、斜向かいで商売をしていた綿野さんから譲り受けたという白磁の壺。

庄川： それともうひとつ庄三という人物の性格が鍵になると思うのですが、それにはまず分析しないと笑。

秋元： 一筋縄ではいかないキャラクターですよ。また、どこまでが庄三の作品でどこからがそうでないかというのが非常に分かりづらく、いわゆる作家物を観るようにはいかないですもんね。一方で完全に個人的なキャラクターを抜きにした単なる様式かというところでもなくて、非常に庄三的な癖と言いますか、個性があるじゃないですか。なかなか変わっているなあと思います。

庄川： 本当に変わっていますよねえ。

秋元： いまお話を伺っていると、庄三が亡くなった後も大勢のお弟子さんたちが輸出工芸の「量」に対応したり、技法的にも様々な制作に対応したりと、フレキシビリティのようなものを持っていたということですね。例えば「五彩しかできない」とか「和絵の具しか使えない」ということでは対応し切れなかったですよ。これだけ多様な技法を持っていたからこそ対応できたということでしょうか。

庄川： そうだと思います。面白いですよ、明らかに作家的メンタリティじゃないといいますが、どちらかというとプロデューサー的に思います。

秋元： 一方で、新しい技法などに対して非常に貪欲じゃないですか。

庄川： 洋絵の具を取り込んだりしてね。彼は海外に行った経験もないんだけど、こんな田舎にしながら、不思議と外国人向けの商売をちゃんと心得ていますよね。

秋元： そうですね。本当に庄三という人は面白いなあ。薄手のものを引いて、金彩の華やかな絵を付けるデザインを考えたのはどなたなんですか。

庄川： 商人だと思います。花器や壺、皿といったオーソドックスなものは当たり前のように作られていましたが。

激動の時代に翻弄された九谷焼



秋元： ヨーロッパへの輸出が多かったのですか？それともアメリカでしょうか。

庄川： 最初はヨーロッパで、イギリスが中心でした。ロンドンでもパリでも万博が開催されましたからね。

秋元： 現地を訪ねたら当時のものが残っているのかもしれませんが。ジャポニズムがアール・ヌーヴォーやアール・デコと西欧で継承されていった過程を考えると、ウェッジウッドの華やかなティーカップが誕生した背景には、実は九谷焼の影響があったのかも知れないと私自身は思います。



庄川： これは唯一残っていた昭和5年（1930年）にベルギーのリエージュで開催された万博の資料になります。うちの店はこの万博を最後に、出展をやめてしまいました。その後、時代は戦争に突入していきます。

秋元： 国際情勢そのものも大きく変わっていききましたもんね。

庄川： 国内外の情勢と本当にリンクしていますよね。当時の九谷焼が結局は残らなかったのは、それを受け継ぐ後継者がいなかったということだと思います。横浜へ出た商人たちはみんな他の仕事をして、ここへは戻ってきませんでした。そもそも九谷焼業界では、他の産地のように十代以上続く家はほとんどありませんから。ですので九谷焼って楽といえば楽ですよ、なにやっても許されると言いますか笑。それが九谷焼の良さでもあり魅力だと思います。いま若い方々が活躍していらっしゃるのも、重苦しいしがらみがないからというのが一つの理由ではないでしょうか。

秋元： 良い面と悪い面の両方がありますよね。意外と九谷焼のイメージって作っている側にしても、どんな技法を使っても九谷と呼ぶことができるので、かえって実際のところがどうなのか分からなくなってしまっている部分があるように感じます。でも本日お話を聞いていて、輸出物というものが時代の流れで生まれたものなので、単純にそれまでの九谷と連続して存在しているわけではないということが分かりました。



庄川： 付け加えますと、本当は金沢の九谷、能美・小松の九谷、加賀の九谷とそれぞれ個性が異なりますので、それを全部まとめて九谷焼と言ってしまうのは、都合が良い面もちろんありますが、それぞれの違いをもっと鮮明にした方がいいのではないかと思います。

秋元： 九谷焼をある限定したエリアだけで考えすぎているところもあるかも知れませんね。もう少し視野を広げてみることが必要のように感じます。

庄川：ここで絵付けをしていた職人が名古屋へ渡り、名古屋九谷の組合を作って何百人が加入していたはずですが、彼らが名古屋から輸出する陶器を一手に手がけていたということもありますし、「横浜絵付け」、「神戸絵付け」という言い方になっていますが、そこにも腕の良い職人が行っています。産業九谷と呼ばれるものではありませんでしたが、当時は芸術や美術という意識がほとんどありませんでしたので、きちんと評価してあげないと気の毒なように思います。そういう時代があつてこそ、今の九谷焼の技術につながるわけですから。ところが輸出九谷の時代がエアポケットのようになって、こういう仕事で外貨を稼いでいたという事実が消えてしまっているんです。

秋元：そうですね。改めて当時の産業としての九谷焼を再発見する必要はありそうです。



秋元：以前は小松のアズマ製陶所で素地を引いてもらっていたとお聞きました。

庄川：そうそう、僕の時代は素地は全部自分のところで引いて、それを絵描きさんをお願いして絵付けをしてもらっていました。当時は「もっと大きいものを」という要求が多くて東剛太郎さんに依頼したら、「庄川さん、俺はこれだけしか腕の長さがいいんだから、これ以上大きいものは引けないよ」って笑。そんな冗談を言いながらお願いしていました。大きいものは、内地物では需要がありませんでしたからね。剛太郎さんは「さすが貿易物やなあ」と言っていましたよ。けれど時代は高度経済成長に突入し、国内需要が多くなってきて、どんどん工賃が上がっていき、だんだんと厳しくなっていました。

秋元：貿易物の生産をやめたのはいつ頃だったのでしょうか。

庄川：ちょうど昭和の終わり頃でした。円高になってね、僕は1ドル360円時代に商売を始めましたから、それがどんどん変動相場になって円の価値が上がる一方で、120円まで行ったときに、これはもうアウトだろうと。

秋元：ものづくりの世界で、円高を乗り切れなくてやむを得ず廃業してしまったという話はよく聞きますね。

庄川：才覚があれば別のやり方で継続できたんですけど、私も年をとってきていましたから、一度全てリセットしようということで石川県に戻ってきたんです。それで、せっかく先祖が残してくれた家ですので、ギャラリーとしてお貸しするなどして九谷焼で頑張っている若い人たちに少しでもお役に立てればと思っています。



この回のまとめ

明治から戦前まで続いた輸出九谷について庄川さんに話を伺った。出来上がった製品が海外に輸出されていたので国内で実物を見る機会が少ないという事情があるからなのか、このあたりの経緯についてはまだまだ知られていない。廃藩置県から大日本帝国へ、そして海外へ目が向いていった明治から戦前の日本にあって、工芸もまた海外を強く意識した産業であり芸術であった。工芸は地方文化を代表する産品で、地域の伝統に根差しているという我々が一般的に工芸に対して持っている認識は、案外新しいのではないかと思う。今日の工芸はこの延長上に位置付けられているが、その位置付け自体を解体して改めて見直してみることが工芸の新たな可能性を開くことではないのかと私は思う。

個性を生み出す技法

Techniques for creating individuality



九谷焼の芸術祭 KUTANiism

主催：クタニズム実行委員会 共催：小松市、能美市 協力：石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合 後援：北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局

〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地(小松市役所観光文化課内) Tel: 0761-24-8130 Mail: info@kutanism.com



クタニズム 

<https://kutanism.com>